原発内の救急医療室／縁の下を支えて

（岩崎泰昌ほか、広島大学　東日本大震災・福島原発災害と広島大学、2013、p.48-53）

2013年11月22日、災害医学抄読会 http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/

■原発内の救急医療室

福島第一原子力発電所救急医療室で活動した医師と看護師の報告である。

広島大学病院集中部の岩崎先生は、東日本大震災の発災当日、厚生労働省による DMAT への出動要請で二本松市の男女共生センターに向かい、被爆の可能性がある避難患者約 120 人に対して重症者のスクリーニングおよび搬送されてきた住民の汚染スクリーニングを行った。また、福島第一原子力発電所の 20km 圏内は避難区域であり、発電所で事故が起きても救急車は来ないため、7 月より発電所内に診察や処置ができる救急医療室（5/6ER）が整備され、常勤医師として活動した。救急医療室には他に看護師 1 人、放射線技師 1 人が 24 時間常駐し、事故時の対応や作業者の健康管理を行っている。

看護師の飯干先生は、救急医療室に平成 23 年 11 月と 24 年 2 月の 2 回派遣された。救急医療室における看護師の役割は①傷病者の看護および医師の診療介助②救急医療室の診療環境の整備及び管理である。飯干先生は統一した看護活動を実施するためには引継ぎをいかに効率よく行うかが鍵であると考え、「5/6ER 看護師活動マニュアル」を作成した。

■縁の下を支えて

東日本大震災で輸送及び情報活動を行った方々の報告である。

藤岡さんは 3 月に DMAT と緊急被ばく医療チームへの後方支援任務が伝えられ、広島からの支援物資の輸送と現地での物資および医師の輸送を行った。現地ではテレビで福島第一原子力発電所が爆発する映像が流れて不安を感じていた。

病院集中治療部の貞森先生は、震災発生の翌日より、広島大学病院に設置された緊急被ばく対策委員会で、主に広域搬送受け入れに伴う関係機関の調整などを行った。3 月 19 日から福島県庁に設置されたオフサイトセンター（OFC）の医療班として活動され、WebEx というビデオ会議システムを導入した。25 日に広大と放医研でビデオ会議を行い、26 日には広大、放医研、OFC の 3 者で第 1 回目の WEB 会議を行った。その後、J ヴィレッジ、救急医学会なども参加するようになった。

事務職員の西田さんは、3 月 29 日から緊急被ばく医療対策本部と現場医師・看護師・技師の連絡調整、及び非常事態発生時の医師・看護師・技師の輸送を用務として派遣された。活動期間の途中から医師が 2 人とも J ヴィレッジへ移り、事務職員 2 人も遠方の送迎に公用車で向かったため、OFC には看護師しかおらず自由に使える移動手段がないという状況が長時間生じた。幸い緊急事態は発生しなかったが、発生した場合必要な役目を果たせなかったので、常に有事を前提として緊急事態への待機要員を確保する必要があったと考えた。

4 月より現地で雇用された渡邊さんは、OFC で福島第一原子力発電所の状況や各種データ及び各種組織よりの情報を適時医療政策室の対策本部へ送信し、福島県立医大の神谷オフィスでは広大の医師・看護師・技師・事務職員の各地への送迎を行った。川内村においての一時帰宅に対する対応にも参加した。